

大人になってゆく子ども

「赤ずきんちゃん」をめぐるって

津守房江

一枚の絵

グレッティングルが、「自分に立ち帰るための自己対話」と言ったのは、幼ない子どものなぐり描きについてである。なぐり描きの時代から十二、三年たつて、子どもたちは、「子どもでもあり、大人でもある存在」となってきた。この子どもたちの絵を見ると、今のこの時期にも、絵は「自分に立ち帰るための自己対話」という言葉が真実だと感ずる。

社会や友人に対する外向きな目、それと同時に、自分は何かという内向きな目がある。絵の中で、音楽で、詩で、自分との対話をする。それだけに、子どもたちの絵は、以前にも増して大切な想いがする。私の立ち入ってはいけない気配を感じた時は、そのまま積んでおくが、子どもの方から、描き上げた絵を見せに来た時には、話し合っただけで楽しむ。こんな時には一人の人と、内的世界を共有する喜びを感じ、これを通

して、人間について少しく、学ばせてもらったことをありがたく思う。こんな中から一枚の絵をとり出して、大人になっていく子どもについて考えてみたい。

「ほら、どう？」と中学生の女の子が、今仕上げたばかりの様子で、一枚の絵を差し出す。画用紙を四つに折りたたみ、カードのようにしてある。その表紙の小さな画面に、色エンピツの柔らかな線で女の子が描かれ、背後に森がある。下の方に絵文字で、「赤ずきん」と書き入れてある。私はこの絵に見入りながら、その時ふと不思議に感じたことを、そのまゝ口に出した。

「この赤ずきんちゃん、ずきんをかぶってないのねえ」すると、「ほら、こうやって、ずきんを脱いで、背中のところにとらしているのよ」という返事だった。私は更にもう一つ、不思議に思ったことを尋ねてみた。

「赤ずきんちゃんは暗い森に行ったのだと思ってたけど、この絵はすい分明的い感じがするけど？」（実際オレンジ色と黄色で描かれたこの画面は明るかった）「ああ、物語っていうのは、その人の、ここからここまでを書いたものでしょう。（両手を広げながら）これはね、物語の終ったあとの、こここのところを描いたの」私は「物語の終ったあと」という言葉に、喜びを感じて、素直に思ったことを言った。

「この赤ずきんちゃんは、おかあさんや、おばあさんにもらったずきんを、後生大事にかぶってばかりいる赤ずきんちゃんでもないし、狼にそそのかされて食べられてしまう赤ずきんちゃんでもない。ちゃんと、うまく森から出てきたし、かりした利口な人なのね。何だか目がきょろつとして、いたずらそうで、あなたにそっくりじゃない」「本当にそう思う？ それじゃあ、これあげる。本当は誰かさんにあげようと思ったの」こうして、この絵は、私の手元に置かれている。

対話は、相手と向き合ったところで自然に出てくるものである。この時には絵と向き合ったところで、ふと私の口から出た言葉であるが、子どもにとっても、意識してこの絵を描いたのではないことが、私の言葉に、考えながら話す様子か

らうかがえた。絵の中で自分と対話するということは、意識的なことではなく、無意識をも含めた自分の内的世界に、語りかけ、語りかけられながら、凝縮した時間を生きることに思う。

赤ずきんを脱ぐ時

この絵を描いた頃、この子は何となく不機嫌でいらいらした様子が続いていた。その内容が何かは、母親にはよく分らないことである。ただこの絵を見た時、混沌の森の中から抜けたのだということを感じて、嬉しく思った。母親や、おばあさんにもらったずきんを脱いで立っていることも頼もしく感じられた。外からは何だか不機嫌だとか、不安定な感じとかに見えるような内的経過の後に、そこをつき抜け、明るい陽ざしの中にいる自分を感じる。自分でも気が付かない内に、ずきんははねのけられている。脱皮という言葉が、この場合にぴったりしていると思った。

脱皮ということは、中学生のこの時期のことだけではない。これまで、成長の時々にかかを「ぬぎ」、何かを「捨てる」ということがあったと思う。その中で印象深い出来事

は、この子が四歳七か月の頃のことである。一夏、一家で御殿場のコロニーで過ごすことになった。生活条件が厳しいので子どもたちに、何か好きなおもちゃを新しく買って行こうと思ひ、家中でデパートに行った。おそらく、この子にとつては、デパートは初めての経験だったと思う。

そのおもちゃ売場で、「これがいい？」と尋ねると、「ゼーんぶ」と答える。何度も歌うように「ゼーんぶ」「ゼーんぶ」と言い続け、長い時間の後にやっと、一つか二つのおもちゃを買った。疲れ切つて、家に帰つてみると、確かにかぶつていた帽子がない。大人たちが不思議に思つて話していると、「帽子捨てちゃったよ」という。「どこで？」「おもちゃ売場で。ゼーんぶ買つてくれなから」という言葉に、あつけにとられ、そのうちに何だかおかしなつてきた。

初めて行つたデパートのおもちゃ売場から、何か一つ選ぶことは、この子には出来ない。一つを選ぶことは、他を捨てることである。そんなことは出来ないから、「ゼーんぶ」と言ったのに受け入れられず、一つか二つを除く殆んど全ての物を捨てなければならなかつた。私たちは、この子のために買った物のことを考へていたが、この子は捨てなければならなかつたことが心を占めていたのだと思う。いつもと

変りなく屈託のない子ども様子は、親に対する仕返しとは考へられなかつた。デパートのおもちゃ売場という新しい世界で、捨てる、という強烈な体験をした、その仕上げとして帽子を捨てたのではないか。

ではなぜ帽子を捨てたのだろうか。靴でもカバンでもなく帽子だったのだろうか。あの日かぶつていた帽子は、母親が日射病にならないように「つばの広い」という注文をつけて、祖母が買つてくれたものである。女の子におそろいはい可愛いからという祖母の好みで、姉とおそろいで白に紺のリボンのついた上品なものだつた。いわば、おかあさんと、おばあさんの想いのこもつたものである。

人が頭にかぶる物を考へてみると、社会的、文化的意味と、保護の意味とがある。この子の捨てた帽子にも、保護の意味と、少しばかり上品だとかおそろいだとかという点で文化的な意味があつた。冠、学帽、ベール、ずきん、等々並べてみると、ずきんは、保護の目的の強い物かと思う。地震にそなへての防災ずきんや戦争中の防空ずきんを思ひ出す。

赤ずきんちゃんの絵にもどつて考へてみると、母親の保護の象徴とも見られるずきんを脱いでしまう。何とせいで

と、心地よい風が髪に当ることであろう。髪を風になびかせることは本当に心地よいことである。ヘブル語でもギリシア語でも「風」は神の霊を意味するそうである。髪に風が吹くようにすることは、自然の力にゆだねることである。ずきんをしつかりとかぶせ、あまりにも風を防いでしまうことは、自ら伸びようとする力をさえぎり、偶然とも思える人との出会いを、妨げることであろうかと思う。

次に何を着るのか

おはなしの赤ずきんちゃんには、ずきんを脱ぐところはお出でこない。まして、赤ずきんの次に何を着るかについては当然触れていない。しかし現実の女の子は、赤ずきんをぬぎ、次に何を着ようか迷う。これは比喩として言っているのではない、「子どもでもあり、大人でもある」子どもたちの日常は、何を着ようかに強い関心がある、母親の手作りの服は喜ばれなくなり、「自分で買いに行く」と言いだす。母親の思いつかないような服を大胆に着てみる。自分がなろうとしているものについての模索を、具体的な衣服でやっているように思われるこのことは、この時期に際立っていることではあるが、同様のことは幼ない時から何回もあった。小学校に入

学した兄の新しい服を一人で着てみている姿、父のネクタイをしめて歩いた日々、幼稚園の頃、赤ちゃんの飾りつき帽子によだれかけをつけて立っていた姿など、数えきれない程である。自分のなろうとしているもの、自分のなりたいたいものをここに見ることが出来る。

子どものぬいだ赤ずきんや、あのデパートで捨てられた帽子には保護の意味が強かったことを述べた。けれども、保護ということだけではなく、大人たちには、おそろいの帽子はかわいいか、上品なデザインだとかいう多少の文化的な意味もあった。母親の保護の手を拭いのけると一緒に、これらもぬぎ捨ててしまう。親たちが、よいと信じて生きてきた生活文化を価値のないもののように無愛想に捨ててしまう。そして何かを求めて模索していく。長い時間かけて、自分らしいものを身につけていく。これらの行動の中に、自分自身の理想を生きようとする人間の、精神性の芽生えを見ることが出来る。

森と一本の木——生命性と精神性

子どもたちが、一步成長する前に見せる混沌とした状態は、森をさまよっていることにとえらられる。どんなふうに入

迷ったのかは、尋ねても答えは得られないだろう。そんな時、幼ない日の同種の出来事を思い起すことは、大きくなくてはからの出来事について考える助けになる。再び、デパートで帽子を捨てた時のことにもどってみよう。あの時、あれも、これも、全部はしい、と言ったことは、子どもらしい自然なことである。自分の心を、あるがままに生きる子どもの姿であり、そのことは生命あるものの生きる喜びとも言える。おもちゃ売場で、体中で喜びながらあれもいと飛びつき、またこれもいと飛びついていく。それはちょうど、赤ずきんちゃんが森の中で、花を摘んでいるうちに時を過してしまったことに似ている。明るい照明のついたデパートではあるが、自分が捉えられ、出口が分らなくなったという点で、森の中にはいったような状態だったのではないか。生命的であるということは、楽しく、豊かではあるが、時にはそれに捉えられて、抜け出せない危険性を持っているのではないか。昔話の知恵は、これを森に住む狼という形にして、私たちに示してくれているように思う。少女の生命力は、あれもこれもと受け入れていくが、木々の梢を仰ぎ見することを忘れ、混沌のまま出口を見出せない危険性がある。

このように、何でも肯定的に受け入れるのに対して、否定

の連続の出会いもある。あれでもない。これでもないと否定し模索する中に、やっと自分が求めているものが子ども自身にも見えてくる時がある。このような心の動きは、理想を求める精神的なものである。生命性を森にたとえるなら、精神性は一本の木にたとえられよう。あれでもない、これでもないと自己否定を繰り返しながら、螺旋階段を上るように次第に高みに昇っていく。梢に近づく喜びがあるが、また大地から離れ、生命性を失う危険性もある。このような性質を一本気というが、一本気は一本木に通じるのではないかと思う。

この子の描いた赤ずきんちゃんの森は、少女の背後にあり、明るく描かれている。だから何も心配することはないのだけれど、狼のその後については心に掛かっていた。狼という動物で示されるところのものが、自然のままの野性的なものを含んでいるとしたら、それまでも殺してしまうのは残念な気がする。また危険だからと言って森に近づかないのも、現実的ではない。どうやって森に近づき、狼と和解するか、どうやって生命性を豊かに保ちながら、精神性を伸ばすことが出来るか。これに対する答が、子ども自身の描いたその後の絵の中に少しく語られているのに気付いた。

「画面の中央に、少女らしい人物が立っていて、その左下に犬か狼のような動物が寄り添って立っている。そんな絵を何かか描いている。この動物は大きく、なかなか精悍であるが、いい目をしている。森の動物がどういいう経過によるのか分らないが、ちゃんと少女の手の下に立っている。これが、完全な答とは言えないだろうが、この時の喜ばしい結果だった。

私は、先年マルク・シャガールの展覧会場で、またあの動物逢に出会ったように感じていた。美しい色彩の女性像のそばに、ロバか牛か、馬か分らない涼やかな暖かい目の動物である。その動物がシャガールの絵には度々出てきて、考えると不思議なことであるが、異和感を感じさせない。むしろ、その動物達によって存在感を感じさせられる。彼は晩年に「人間の創造」をはじめとする旧約聖書の連作に取り組むが、その中に、宇宙の中の人間、生命性と精神性の調和した素朴な人間存在を見るように感じた。

大人とは何か

赤ずきんちゃんを描いた時から、二年近くの時がたった。街へ出た帰り道、並んで歩く子どもの口から「子どもが大人

になる。こんな当り前のことが、なぜこんなに困難なのか」と語られる。これは友人の言葉と言ったようにも思うし、その前にヘルマン・ヘッセの「デミアン」について話していたので、その冒頭の言葉をもじったのかもしれない。私は話を聞きながら、「子どもが大人になる」ということに心を奪われていた。私たち子ども派の間は、知らず知らずのうちに、「子どもとは何か」という問の中を生きている。しかし、その子どもは、今、大人へと最後のステップをよじ登ろうとしながら、「大人とは何か」と熱心に問いかけている。そのことに心を動かされながら、考える。

子どもたちが幼ない時、私たちは子どもが、土や水、太陽、風に触れ、自然のリズムの中で生きるように本気で努力した。子どもたちはよき友だちにも、よき年長者にも出会った。これらの人々は、風のように面白い友人だったり、おひさまのようなおじいちゃまだったり、宇宙の一部のように感じられていたように思う。今、大人に近づく子どもたちに、私の願っていることは、「人間」に出会ってほしいということである。自分の理想を育てるような、よき師、よき友に出会ってほしいということである。